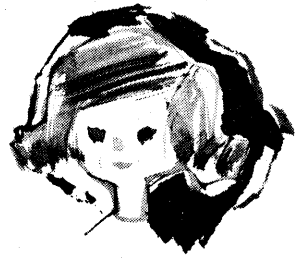


紙 一 重



堀 合 文 子

幼児教育はむずかしい。教育の相手は幼児なので、教師に対して何も文句も抗議もいわない。

それだけに私も現場の教師は、常に学び、修養しなければ幼児にすまない。

幼児のあそびを大切にということは幼児教育者として一つの常識になってしまった。しかし、そのあそびを大切にすする仕方はさまざまで、やり方によっては人から誤解もされるし、ただただ単にあそびを大切に、あそびさせてばかりいればよいと考えられてしまう場合もあり、むずかしい、という声もそこから出てくる。

“あそびを育てる”と一口でいうけれど、その内容は深い。単にあそび自体を育てるといっても、あそびの中で行なわれる幼児の生活全体を、個人個人のよき所をのびし、

指導すべき所はその機会をとらえて指導するので、朝、一人幼児が来れば、教師と幼児とのそのかかわりあいから一挙一動、一言一句指導となって幼児にかえっていく。

また、それが一対一の場合も、一対グループの場合もある。

これは日々のこと、個人個人のこと、また組全体のことにもなるので、教師と個人のふれあいであることを考えていると、その間、他の幼児は留守になってしまうのでは困る。

教師の神経と体の動きは大へんであり、大へん大切になつてくる。

また教師にとっては相手が幼児であるがために、教師の一挙一動、一言一句からすべてを吸収してしまうので、二

年後、三年後には、いかに教師と幼児との生活がなされてきたかということによって大きな差が生じてしまう。

教育というものはそういうものかもしれないが、日々々々で、何年経験したからできる、上手だというものではない。三年前、三歳児を指導した、また今年も三歳児だから、あの時こうしたからやはりあれをやりましょう”は、通用しない。三年の間に世の中もかわり特に現代では急速の進歩、その中で生まれてから育つて来た幼児は三年前の幼児と違うのは当然で、やはりその幼児の生活を見て、観察して、その幼児には今現在、どういうことをしてあげるべきかを考えて、そこに指導が、教育が生まれてくるのが当然であろう。これがゆつくり教師が前もって考えて指導する場合と、瞬間瞬間にその場で教師が幼児の行動、生活をみながらその幼児に適切な教育をつくっていかねばならない場合とがある。

言葉でいえば、こんな堅くるしいことだが、常にこれの連続だ。ただし幼児には世話ということも中に入ってきてなかなか気も心も体も頭も忙しい。三十五人幼児がいれば三十五人分、神経と体をつかうことになる。

こう考えて私は経験の上にあぐらをかきわけにはいかな

いと思う。もちろん、何年か経験がある人はある安定感はあるだろうが、経験を生かすことはよいが、うっかりすると経験が邪魔をして幼児への適切さをかくことがあるだろう。

しかし、幼児教育者には多方面の知識と能力が無限に必要だ。おおげさのようだが、教育を瞬間瞬間、電光石火のように生み出していく能力だ。

一緒に一堂に会して団体指導をするならば、ある年限の経験はベテランの教師をつくるだろう。が、このように考えていくと経験は何にもならないといっても過言ではないだろう。幼児は常に成長し、幼児側も何の能力をいつ出してくれるかわからないので、それをみのがさず(機会をとらえて)適切な指導をするのだから以上のような能力を教師が常にもっていて、いつでもそれがぱっと出せるだけの用意が大切となってくる。

このような指導は、いつも遊んでいるようで表面にはみえない。一堂に会していると、ああ今歌を歌っていると、今お話しているとか、何か画いているとかわかるが、このような指導はみえないし、常に指導がなされているので、大へんむずかしいことになる。

教師側からいえば、手もぬけるし、また教師の力がたりないと二年後、三年後に幼児の上にしわよせはきてしまう。

外側にみえるような指導はやさしいが、みえない指導はむずかしい。

あそびの中でも指導が大切だということは、一口でいえばこのようなことで、その方法は細かく、緻密で、深く複雑なのでまたの機会にするが、指導が大切ということがわかると、そこで技術のある教師と、ない教師との別れ道になつてしまい、遊んでばかりいるとだめだと思つたとあそびの幼児の生活を生かしながら表面のみえる所だけを一生懸命指導してしまう。たとえば、生活態度は自由であるが、約束とか、言葉でもつてまた教師の威圧で表面にみえる形のみととのえる指導になつてしまう。おはようございますなど、心のなにもないあいさつが交されたり、びくびくして神経をびりびりさせたり、毎日生活している中に顔つきもちがつてしまつたり、自由にやっていますといつても一堂に会してやる一斉と同じ指導、いな、それ以上規制された指導になつてしまう場合がある。

外側からみた時、指導されて大へんよいようにみえても、中味のからっぽの子どもが育つてしまい、学習になつても

ちゃんと状況判断し自分のすべきことを自発的にしたりすることができなくなつてしまう。

また、子どもをよくみることも必要、考えることも必要だが考えたり、議論、研究ばかりしていても幼児を指導し育てるわけにはいかない。幼児と共々に生活し、教師と幼児との間に生じるものを感じたり理解したりすることにより、言葉にあらわせない何ものかがある。それを育てたり、指導したりするのであつて、蓄積された学問、技術が、教師自体、具体的に出さなくともその教師からにじみ出てくる。したがつて、目にもえない、表面に形としてあらわれない指導を大切にするには、教師としてその蓄積を常に新しく勉強しておきなつていかねばならない。

幼児期には幼児の生活を充分させ、その生活をくずさないで、その中に必らず指導はあり、教師のいいしれぬ、頭の中の動きが緻密に敏感に働いていることが大切である。

自由に、幼児の生活、自発性を尊重すると、こんな所に紙一重のむずかしさが存在している。

お互いに放任にならないその紙一重の大切さを理解し、実行できる教師になりたいものだ。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)